



太夫 竹本駒之助 三味線 鶴澤津賀花

特別出演 能「鳥帽子折」より

寺澤幸祐（観世流シテ方） 寺澤拓海（観世流シテ方） 久田舜一郎（大倉流小鼓方）

義太夫節という語り芸の世界において、現在男女を超えてその最高峰の一人と称されるのが、本日お招きしている竹本駒之助師です。その至芸にふれる貴重な機会として 6 年前にスタートした女流義太夫の会で今回取り上げるのは、今年が三百回忌にあたる近松門左衛門原作の「鳥帽子折莖（みばえ）源氏 伏見の里の段」です。

原作の「源氏鳥帽子折」は、源義経伝説を下敷きに、先行する能「鳥帽子折」などを受けて脚色された全五段の時代物で、義経が牛若丸と呼ばれた幼少期から、平家追討に立ち上がる直前までを描きます。外題は、成長した牛若丸が初めて鳥帽子を着けて元服し、名を義経と改める三段目の内容にちなむものですが、「伏見の里の段」は、その前段のキリにあたります。

この度特別出演として、能楽観世流シテ方、寺澤幸祐さんと拓海さん、そして大倉流小鼓方の久田舜一郎さんをお招きし、先行する能「鳥帽子折」から、「伏見の段」では描かれていない、牛若丸元服の場面をお聴きいただきます。

奥州へ下る途中、近江の鏡の里まで来た牛若は追っ手が迫っていることを知り、元服して稚児姿から装いを改め、敵の目を欺くことを思いつき鳥帽子屋を訪れます。なんとしてでも源氏の象徴である「左折れ」の鳥帽子を所望する牛若に、この平家一色の時代、平家の象徴である「右折れ」ではなく「左折れ」とは思ひがけないことと、鳥帽子屋は左折れの鳥帽子にまつわる逸話を語り始めます。ほどなくして鳥帽子は出来上がり、それを召した牛若の姿は、たいそう気高く立派なものであったという件です。



さて、「鳥帽子折莖源氏 伏見の里の段」ですが、あらすじは次の通りです。

平家の追っ手を逃れ、雪の伏見に行き暮れる常磐御前と三人の幼子たちが一夜の宿を乞うた家は、平家方の侍、弥兵衛宗清（やへいびょうえむねきよ）の妻白妙の住家でした。実は、源氏の忠臣藤九郎盛長（とうくろうもりなが）の妹である白妙は、宗清が気づかないうちに常磐らに早く立ち去るようすすめます。極寒の中親子は軒端を立ち去りがたく、凍え倒れる母に子供たちは自分の衣服をぬいで着せ掛けます。その様子をうかがっていた宗清は心打たれ、悩んだ末、4人を見逃します。



本曲は、人形浄瑠璃文楽での上演が長らく途絶えており、現在は佐渡や、九州で伝承されている一人遣いの人形浄瑠璃（文弥節人形浄瑠璃・国指定重要無形文化財・文弥節という古浄瑠璃にあわせた人形芝居・宮崎、鹿児島、石川、佐渡）でのみ上演されている稀曲となっています。しかしこの誰もが知る源氏の御曹司牛若の元服を題材に、源氏旗揚げの機運をふくみつつ目出度く終わる本曲は、明治頃には広く人々に親しまれていた演目だったようで、二段目キリの「伏見の里の段」が、様々な外題による一幕物として上演されていたことからもそれがうかがえます。

劇中、平家方の宗清が忠義に心を縛られ、苦悩しつつも常磐親子を見逃してやる件は、今なお劇的な感動を生む場面です。また本曲は、「降る雪の」の一旬で始まりますが、この夏の盛りにもかかわらず、駒之助師によるこの冒頭一句の語りで、伏見の里の一面の雪景色と、そこにさまで出した常磐親子を押しつぶすような空気感が感じられます。この曲は、駒之助師が四代竹本越路太夫から継承し、大切にされてきた演目です。その貴重な伝承者といえる駒之助師の真骨頂といえる語りの妙をご堪能いただけたかと思います。

